



2019年4月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2019年4月
第 116号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



春が巡って来また

目 次

漢点字の散歩（53）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（109）（山内 薫）	5
岡田メモについて	10
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	13
ご報告とご案内	22
漢文のページ	23
編集後記（木下和久）	27

漢点字の散歩(五十三)

岡田 健嗣

今女画



「カナ文字は仮名文字」という題で本欄を書き進めて参りましたが、図らずも季刊で発行して参りました本誌を、私の健康上の都合で、昨年一〇月と本年一月の二回分のお休みをいただくことになってしまいました。右の題での拙稿はまだ完結しておりませんし、考えてみたいことが山積してもおります。さらにその向こう側までの見通しも立っていない状態でもありません。一定の結論と申しますか、それなりの答えの出るところまでは考えて見たいという気持ちは強くあります。しかし今回はお許しをいただいて、思いつくような、たわいない軽口を労わせていただこうと思えます。お付き合いいただければ幸いです。

今回の題として掲げました「今女画」、さてどのよ

で、これと同様の言葉が、いつも心のどこかに響いていたように思います。

「いま・なんじ・かぎれり」と読み下すようです。

「今」は「いま」、「女」は「なんじ」、「画」は「かぎる」と読みます。

もう十年以上前になりますが、図書館に納入する漢点字書として、岩波文庫の『論語』を漢点字訳したことがあります。横浜中央図書館に所蔵されています。勿論『論語』ですから、私に読み解けるとも思えませんが、時折それを引つ張り出して、表面を撫でるようにして、その感触を味わうようなことをやっています。そこに一つ、グッと来るものを見つけてしまいました。

『論語』「雍也(ようや)」第六の二二、

再求曰、非不説子之道、力不足也、子曰、力不足者、中道而廢、今女畫、

岩波文庫の読み下し分をそのまま採録しますと、

再求(ぜんきゅう)が曰(い)わく、子(し)の

道を説（よろこ）ばざるには非ず、力足（た）らざればなり。子の曰（のたま）わく、力足らざる者は中道にして廃す。今女（なんじ）は画（かぎ）れり。

訳しますと、

冉求（ぜんきゅう）が「先生の道を（学ぶことを）うれしく思わないわけではありませんが、力が足りないのです。」といったので、先生はいわれた、「力の足りないものは（進めるだけは進んで）途中でやめることになるが、今お前は自分から見きりをつけている。」

となります。この冉求とは冉有とも呼ばれる孔子の弟子の中でも期待をかけられていた弟子の一人で、『論語』の中にしばしば登場する人物です。この冉求が、つい弱音を口にしたところで、師から叱咤されたという構図が浮かんで来ます。（もっともこれは私の解釈で、背後に他に別の事情があったのかもしれない。）

先ほど「これと同様の言葉が、いつも心のどこかに」と書きましたが、冉求と私とが同位置にあるというのでは、勿論ありません。私の場合は、あくまでも私の勉強不足と努力の不足が心の底にわだかまっていた、弱音の形で表に現れたものに過ぎません。しかしこの「かぎれり」の句は、『論語』の文の文字に触れた途端に、胸に突き刺さって来るような迫力を覚えたのでした。

現在も『論語』は、隠れたベストセラーと言われる。国鉄時代のキヨスクでも容易く手に入れることができたと言われます。現在でも同様に売店で求める方も多いものと思います。旅路の、暫し沈思する時を過ごす、恰好の友となってくれる書物なのでしょう。いや「友」ではなく、普段は精神的にも時間的にもその余裕がないところに、車中、他に何もすることのない時間をもらって、さて何をしようか、何か普段と違った、ヒントをもらって何かを考えるとすることもあつてよいと、多くの人は考えたのかもしれませんが。「考える」という時間の貴重さを、人は求めるのかもしれませんが。（もっとも現在は、乗り物に乗る人の八割が、スマートフォンに見入っているようですので、人

々の求めるものも、国鉄時代とは大きく様変わりしているのかもしれませんが……。)

ここでいう「かぎれり」とは、きみは自らその可能性を閉ざしているのだよ、ということですが、孔子が多くの戒めを残している中でも、これは最も具体的な、手厳しい指摘のように思われます。何が手厳しいかと言えば、自らに問うてみなさい、どうですか？という言葉が、無言の内に続いているからにはかなりません。冉求ほどの人でも、自らに問わないままに弱音を吐いてしまう、それが普通の人間の有り様とすれば、そこでおしまいにしてよいのですか？と師は問うています。それが現在にまで問い続けている、そして私にも……。

若いころの私のような、また私と同様の視覚障害者にとつては、この問いは、さらに極めて厳しい問いだと言わないわけには参りません。なぜならば、冉求の言う「子の道」どころか、私には、手がかりになるものは何もなかったのですし、「かぎれり」と言われても、手も足も出ない、というものだったからでした。

しかし私ばかりでなく視覚障害者諸君をも含めて、もう一度よく考えてみたいものです。本当にそうだっ

たのか、手がかりはなかったのか、誰か手を差し伸べて下さる方はいなかったのか……。求めよさらば与えられんということもあるうではないか、と言う声が、どこからか聞こえて来そうです。

私が『論語』の文章に出会うことができたのも、言うまでもなく漢点字版の完成によりです。そこで始めて冉求と孔子との談話に、文字を通して触れることができたのでした。漢点字の文章を触読して文章を読むという体験は、このような経験となつて、かなりの年齢に達した私に、多くの検知を与えてくれたと感じております。このことは本会の活動なしには叶わないものでした。しかも取り分け特筆しなければいけないことは、私が読みたいと希望する書物を、漢点字書として実現して下さった会員の皆様がおられたということです。このことはそれまでの生活に照らしてみると、ほとんど奇跡というほかありません。そのような奇跡をもたらして下さった横浜、そして十年遅れて活動を開始した東京の会員の皆様には、言葉を尽くしても尽くし切れないものがあります。この奇跡がどのようにしてもたらされたのか、私が本会の活動を始める決心に至ったところから生じたと言え言えるのかもしれない

ませんが、そうは言ってもその時に、二十年後の現在の、この『論語』を初めとして多くの漢点字書の製作と、それらを触読することから得られている知識や思考や思想について、どの程度予想できていたか、甚だ不案内と言うほかないものでした。私が本会の活動をどのように進めて来たかと言えば、間違いなく無我夢中、五里霧中の中のこと、実際あの本を読んであしように、この本を読んでこうしようといった目的意識というものは、ほとんどなかったと言つてよいと思いません。そうではなく、単に私の、読書欲に正直に選書して、それに従つて活動のプランを立てていただき、実施していただいたのが本会の活動と言えるように思います。そのようなアモルフが、現在のような壮大な規模の結果をもたらして、また結果として本会の漢点字書の製作に、一つの筋目をもたらしているという次第なのです。このことは、誠に不思議と言えば不思議なことです。またこのことは、偏に会員各位の直向きのご尽力によるもので、自画自賛の誹りを恐れずに申せば、誠に異例な活動と言つてよいものと感じております。

残念ながら大目標の〈漢点字の普及〉にはまだまだ

及びませんが、〈漢点字〉という触読文字が、日本の視覚障害者にとつて、どれほど有意義なものかということが、本会の活動から、ほぼ証明できたものと考えます。このことはご要望があれば、何時でもご説明できますし、漢点字の学習をご希望になられる方には、何時でもそのお手伝いをさせていただく用意がございます。

また本会の活動の成果は、視覚障害者の読書のもう一つの方法である〈音訳〉にも、読書という共通の目的として、多くのヒントを授けておられます。漢点字から得た経験は、極めて大きな蓄えを与えてくれております。私自身、音訳の今後を楽しみます。

私にとつて「なんじ・かぎれり」とは、自らに正直であれ、という励ましと受け取つてよいのかもしれないと、現在は受け止めておきたいと思つております。まだまだやり残したことは沢山あります。やり尽くすということはないのですが、どこまでできるか、続けて参る所存でおります。

変わらぬご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

点字から識字までの距離(一〇九)

野馬追文庫(南相馬への支援)(二七)

山内 薫

今回は児童書翻訳者の野坂(のぞか)悦子さんから原稿を頂きました。文中にもありますように、野坂さんは絵本作家の武田美穂さんと共に二〇一三年から毎年南相馬市の児童発達支援事業所「じゅにあサポートかのん」に行つて「紙芝居と絵本 ワークショップ」をなさっています。野坂さんはオランダ語を中心とした数多くの児童書や絵本を翻訳されています。また『ロロとレレのほしのはな』(トム・スコーンオーへ絵 小学館 二〇一三年)『ようこそロイドホテルへ』(牡丹靖佳絵 玉川大学出版部 二〇一七年)などのご自身の著作もあります。墨田区立図書館の蔵書検索で探しますと一三三種類の本が所蔵されています。ちなみに国立国会図書館の児童書で検索しますと一八一種類の本が所蔵されていることが分かります。文中にもありますが、二〇〇一年に「紙芝居文化の会」の創設にも加わり、紙芝居を海外に普及する活動をなさっています。武田美穂さんは『となりのせきの

ますだくん』(ポプラ社 一九九一年)シリーズや『オムライス ヘイ!』(ほるぷ出版 二〇一二年)などの多数の創作絵本の他、松谷みよ子の『モモちゃんえほんシリーズ』(講談社 一九九五〜一九九七)など多くの本の絵を担当されています。

二〇一八年七月に、南相馬市原町区にあるじゅにあサポート「かのん」へ行ってきました。今回で五回目の訪問です。児童発達支援・放課後等デイサービスの支援事業所「かのん」とのつながりは、臨床発達心理士、JBBY会員の攬上久子さんのご紹介で始まりました。

南相馬で野馬追文庫の活動を続けてきた攬上さんと共に、絵本作家の武田美穂さんと児童書翻訳家の私が、じゅにあサポート「かのん」を初めて訪問したのは二〇一三年十二月のこと。「子どもた



ちへ（あしたの本）プロジェクト」（呼びかけ団体—日本国際児童図書評議会、日本出版クラブ、出版文化産業振興財団）による支援の一環でした。紙芝居の実演と絵本の読み聞かせをしたあと、武田さんが中心となって、その年は「キラキラバッジをつくろう！」というワークショップを行いました。

初めての訪問のあと、「かのん」の活動についてまとめた文章があったので少し引用します。

じゅにあサポート「かのん」では、ADHD、アスペルガー症候群、情緒障害などをもつ子たちに、学習支援、コミュニケーション支援を個別トレーニングで行っている。「ここは対人関係を構築するスキルを学ぶための事業所」だと、所長の新妻直恵さんはいいます。「絵本は欠かせません。毎日、絵本を子どもにも音読してもらっていますよ。どの子ども、これが怒っている顔、これが嬉しい顔と、絵を見てまわりの人の感情を読み取るすべを覚えます。そして、悲しいときはこう言うんだと、気持ちを表す言葉も豊かにしていくんです」保護者への働きかけも大切に行っているそうで、「悩みながら子育てするお母さんたちの話を聞く、まあ、《駆け込み寺》みたいなところですよ」と、笑顔で話してくれました。（二〇一四年絵本学会会報「リ

レーエッセイ」より）

「かのん」には、現在、じゅにあサポート「かのん」のほか、姉妹施設のきつずサポート「かのん」、ちやいんどサポート「かのん」があります。子どもたちの障がい程度や年齢に応じて、通う施設が分かれています。東日本震災のあと、とりわけ発達に遅れのある児童に困難が集約されて押し寄せ、そんな子どもたちのために、市民が立ちあがってNPO法人「きぼう」をつくり、「かのん」の運営を始めたのです。

私たちも武田さんも、スタッフのみなさんの熱意、スキルの高さに感心し、若い人たちが生き生きと働く姿をとっても嬉しくいっぼうで、「ここは安心できる」という場を、震災後の不安やストレスのなかで創りだすためには、想像を越える苦労があるのではないかと思いました。

「スタッフは相当がんばっていますよ。でも単純な日々なので、こうして外から人が来てくれることが、子どもたちにとっても私たちにとっても、ほんとに嬉しいんです。またお二人で来てください」

気さくな新妻所長のそんな声を聞き、別れがたくなりました。手をふって施設をあとにするとき、次回はいつ、どんな形で「かのん」を訪れるたらよいかと、武

田さんと私は考え始めました……。

私たちの働きかけと、「かのん」のみなさんの願いが一致して、武田さんと二人での南相馬訪問は、その後回を重ねることになります。新妻さんと相談のうえ、二回目の訪問からは武田さんの指揮のもと、あるときは巨大迷路、あるときは秘密基地と、大きなものを一緒に創ってきました。子どもたちは、迷路のなかに寝転んだり、もぐったり。カッターで窓を開ける、色紙やシールを貼る、テープを垂らすなど、ひとりひとりが年齢や発達の程度に応じて好きな作業を続けるのです。スタッフや保護者のみなさんもひとつになつてのワークショップはとても好評で、新妻さんによれば、「思い切り外で体を動かすことの少ない子どもたちの、ストレス発散に役立つ」のだといえます。二階ホールにできた基地や迷路は、しばらくそのままにされ、私たちが帰ったあと子どもたちの遊び場になるのだそうです。

こうして昨年、五回目の訪問を迎え、ワークショップのテーマは武田さんの発案で「巨大かいじゅう」に決まりました！（「紙芝居と絵本の読み聞かせ」「ワークショップ だんぼーるあーと一巨大かいじゅう」

を告知するちらしを御覧ください。）

でも実は今回はもうひとつ、裏メニューがありました。それはスタッフを対象にした紙芝居講座。ワークショップ前日の七月六日に、職員研修の形で講座を開いていたことになったのです。紙芝居には、子どもたちを変ええる力があります。ふだんは気が散って物語をうまく楽しめない子が、なぜか集中して物語を聞いてくれます。そこには絵本とは違う紙芝居ならではの秘密があつて、「紙芝居文化の会」の運営委員である私は、紙芝居ならではの共感の秘密を全国各地で伝えてきました。そんなスキルを「かのん」にも分かち合いたいとずっと考えていて、長年の願いが今回かなつたのです。

夕方四時半から始まった講座では、まず最初に「紙芝居と絵本はどこが同じで、どこが違うのか？」「紙芝居ならではの形式や、紙芝居の特性とはなにか」についてお話ししました。その後、私が脚本を手がけた『かしこいカンフ』『やさしいまものバッパー』もふくめた五作品を、五名のスタッフに演じてもらいました。なにしろスタッフは日々、子どもたちに愛情をもつて接している方たちばかりです。どの人も読み方にゆつたりしたリズムがあり、声に張りがありました。

講座のあと、「演じ手がいなければ、紙芝居は成立しないという発見が面白かった」「これからもっともつとやってみたくなった」という声を聞き、無理をお願いした甲斐があつたと、ホッとしました。新妻さんも「違いがわかると、眼からうるこですね。紙芝居への興味の持ち方がぜんぜん変わりました」と感想を聞かせてくれました。

そうして待ちに待った7月7日。九時半よりメインイベントです。参加者は、三つの「かのん」に通う子どもたちと、保護者の方たち約七十名。二歳から十五歳までの幅広い年齢層の子どもたちが集まりました。二階ホールは、イベントが始まるまえから、子どもたちのやる気でむんむんしています。

まず、私が武田美穂さんの新作紙芝居『おはよう！パワ―』を演じて、「おはよう！」の持つ元気な力をみんなで分かち合いました。続けて演じたのは『カヤネズミのおかあさん』（キム・ファン脚本、



福田岩緒絵）。いっしょけんめい巢をつくり、子育てをし、ほかの動物たちから子ネズミを守ってお引越しをするおかあさんの姿が、南相馬の大人のみなさんの姿に重なって、目じりが熱くなりました。

そして真打ち、武田さんの登場です。自作の絵本『しんけんしようぶ だるまさんがころんだ』を読んだあと、色紙で作った小さなかいじゅうのサンプルを見せながら、「今日は段ボールを使って、巨大かいじゅうをつくります」と説明が始まります。

「かのん」で山ほど集めた家電の段ボールと、武田さんがこの日までに何箱も送ってくれた宅急便（さまざまな色のガムテープや布、リボンなどの材料をそろえたもの）が輝きを放つ瞬間が訪れました。武田さんと「かのん」のみなさんの労を惜しまぬ準備に、私はもう頭が下がるばかりです。ワークシヨップは正午まで続き、いろんな顔、いろんな形、いろんな大きさのかいじゅうが、ホールのあちこちに登場しました。ざわざわ森に住む「がんこちゃん」の人形が気に入って、ずっと抱っこしていたお子さんもありました。飛び回ってかいじゅうづくりの様子を見まわり、子どもたちを励ます武田さんの横で、私はうろろするばかり。それで、できるだけ大人のみなさんの話を聞こ

うと思いました。一緒にものを作るなかでの安心感が、心を解きほぐしてくれたのでしよう。おかあさんたちに「作るのがお上手ですね」「すてきなデザインですね」と、声をかけ、少し話をするうちに「うちの子は多動だつていわれています」「私は娘にすぐ怒ってしまつて」と、思いを語ってくださいました。二時間にわたるワークシヨップの最後は、紙吹雪！ 大人も子どももひとつになつて、紙吹雪を力いっぱいまきちらして巨大かいじゅうの完成を祝いました。

年にたった一度の訪問ですから、たいしたことはできません。それでも毎年、私たちの紙芝居やワークシヨップを楽しみに待っている方たちがいる！ そう思うたび、ふるさとがひとつ増えたような気がして、「かのん」に足を運びたくなるのです。

原町の大通りも建て替え



がすすみ、生活は少しずつ落ち着いてきたように見えます。けれどもそれは外から見える部分だけ。南相馬に生き続ける方たちが、津波や原発事故で失ったものを決して忘れることはないでしょう。ただ、大震災がなければ、私たちのこんな出会いもなかった。被災地と東京との物理的な距離は埋まらないけれど、目を開き、耳を傾けることで、心の距離は縮まっていくように思えるのです。

武田さんと私が「かのん」訪問を続けるあいだに、お子さんもスタップも少しずつ顔ぶれが変わっています。たとえ人は変わり、療育の内容が進化しても、「かのん」がそこにあることに変わりはありません。たぶん私は、「かのん」で感じられる信頼感に満ちた空気が好きなのかもしれません。

紙芝居や絵本、ワークシヨップを通して非日常の世界をつくりだし、子どもと大人と、外部の私たちもいつしよになつた大きな遊びのなかで、はたして何が見つかるとはどう？ 外にいる私たちが、町を毎年訪れることに、どんな意味があるのでしょうか？ それを考え続けるために、今年も南相馬に通うことになりそうです。

左は、音訳に当たって、漢字の説明の試み

について、本会のホームページ(<http://www.ukanokai-web.jp/>)に掲載されているものです。皆様のホームページへのアクセスをお待ちしております。

このサイトにございます「岡田メモ」(漢字の音訳「岡田メモ」からアクセス)は、ご自由にダウンロードして、お試しいただけます。

「岡田メモ」について

「岡田メモ」は、本会の岡田健嗣が、音訳の活動に關わる中で、漢字の文字説明の必要性を感じて、メモとして作成を始めたものです。現在では3000字を超える数に達しましたので、本会のホームページに置いて、どなたでもダウンロードしていただけるようにしました。

お試し下さい。

音訳とは

音訳とは、音訳書を製作する最も初めの過程です。音訳書とは、一般に音訳者によって音声化されたものを録音媒体に収録して、主として点字図書館や公共図書館に保管・運用されて、視覚障害者、あるいは視読の困難な方々に貸し出されて、聴読に供されることを目的として製作されるものを言います。従って音訳書とは、通常の書籍の概念である、文字で表されていて一冊に綴じたものというものからは、かなり離れた概念のものだと言わざるを得ません。

このようなものを書籍として位置づけるようになるには、それなりの経緯があつたものに違いありませんが、ここではそこには触れません。ただ言えることは、文字は、視覚という感覚器官に訴えてその機能を果たすもので、その意味では、ルイ・ブライユの点字の創作と並んで、この音訳による聴読という世界の開発が、視覚障害者に書物の世界の扉を押し開いたものであることは間違いありません。

有史以来の人間の営みから、文字から得る知識や経験を無視することはできません。また文字を方法とし

て情報を伝達し、思想を述べ伝えるという営みが、延々と続いて来ました。

しかし文字は、視覚に訴えるものですので、視覚障害者にとっては最も大きな障壁でした。多くの情報や知識や思想はこの文字によって伝えられ、吸収され、さらに発展し伝播して行きました。が、その中で視覚障害者だけは、そこから取り残されていきました。その影響は、現在もまだまだ後を引いています。

音訳が始まったのは、正しく録音媒体が開発され、安価な装置が普及し始めてからのことで、せいぜい半世紀ほど遡ることができるとは限りません。歴史というほどの歴史もありません。取り分けわが国では、わが国の言語の文字表記の複雑さが、この音訳を困難にしています。

音訳の原則は、言うまでもなく、書物に書かれている文字を、そのまま音声に出して読み上げることにあります。そのまま読み上げるのですから、何も考えなくとも、文字通り文字を読み上げればよろしい、ということになるのですが、わが国の言語は、一朝一夕にはそれを許してくれません。

わが国の言語は、もともと文字を持つことがありませんでした。その代わり、大陸から表意文字である

〈漢字〉がもたらされて、中国語の音をもとにした「音読」と、その文字の表す意味から、わが国でそれが何を意味するかというところから読み解かれた「訓読」という読み方、さらに中国語にはない「て・に・を・は」や「送りがな」と呼ばれる音で表される文の要素を表す文字を、〈漢字〉から〈仮名文字〉として創出するなど、わが国独自の工夫が、弛むことなく続けられて、現在に至っています。それだけに、単に書かれている文字をそのまま音声化すればよろしいとは、残念ながら言うことができないのです。

そこで音訳は、音訳は文字をそのまま読者に提供するものではないという、音訳書を書物として捉えた場合の、最も基本的な部分に由来する困難に行き当たります。その中の一つが、日本語の書物の音訳では、〈漢字〉で表されているところをどのように音声で表現するかということが現れて参ります。それが音訳者の肩に重くのしかかっているのです。そこで「岡田メモ」は、一つの方法を提示しようと試みたものです。これまでの音訳書では、〈漢字〉の説明は、音訳者の創意に委ねられていました。が、その結果、一つの文字の説明が、音訳書によってまちまちだったり、場合によってはその音訳書の中でも、同じ文字が出て来

る度に異なった説明になっていたりということが、しばしばありました。そこを何とか統一した説明ができないか、これがこの「岡田メモ」のコンセプトです。

「岡田メモ」の原則

音訳の中で現在行われている漢字の説明は、先にも述べましたように、音訳者の創意に委ねられています。どのように説明するか、統一されてはいません。しかも、適切な漢字の説明とはどのようなものかということも、どこからも提示されていません。

かつてパソコンが普及し始めて、視覚障害者にも音声読み上げのソフトウエアが開発されて、そこに漢字の説明が搭載されました。そして音訳者がその読み上げソフトの説明を参考にして漢字の説明をしたことがあります。ところが音声読み上げソフトの漢字の説明は甚だ不完全なもので、間違った説明や間違った理解を導き兼ねない説明が散見されるものでした。そのためか、現在ではまたそこから離れて、音訳者の任意の説明が一般となっています。

そこで「岡田メモ」では、以下のような原則の中で、説明を試みることにしました。

① 漢字の特徴は、その三要素と言われる「形・音・義」にあると言われます。この三つの要素に触れないものは、漢字の説明とは言えないと考えました。

② しかし「形・音・義」それぞれも極めて大きな要素です。この三つの要素を組み合わせて説明とした場合、説明そのものが大変大きなものになってしまい、文章の流れを阻害し兼ねません。そこで「岡田メモ」では、「形」と「音・義」とを分けて、まずは「音・義」を以て漢字の説明とすることにしました。「形」である字形の説明は、「岡田メモ」には含みません。これまでの漢字の説明には、字形を説明することによってなされることがありましたが、ここではその方法は採りません。

③ 字形の説明を必要とすることも必ず出て参ります。ここでは字形の説明の方法に沿って説明していただきます。その方法は、「岡田メモ」とは別に掲げません。

④ 「音」には「音読」と「訓読」があります。「音読」にも「漢音・呉音・慣用音・唐音」などがありますし、「訓読」も一つで代表させることが困難な場合が少なくありません。それらの取捨は、極めて肝要と考えます。

⑤ 「義」を説明するのは極めて困難です。訓読もその一翼を担ってくれますが、それだけでは不十分と考えました。そこで、音読の熟語を掲げることで表すことにしました。必ずしも正確な説明とはなりません。が、聴読者の皆様には、訓読と音読の熟語、そして音読という並びからその漢字を類推していただくことにしました。

⑥ 以上をまとめますと、漢字の説明は、原則として「訓読・音読の熟語・音読」という順を以て行いました。漢字には、代表的な訓読が幾つかあったり、通常の音読が幾つかあったり、訓読が設定されていないかたりの音が幾つかあったり、訓読が設定されていなかったりということがしばしばあります。また同音・同訓の漢字も珍しくありません。そんな場合は原則から離れた説明になったり、熟語の選択を工夫したりしました。

以上が「岡田メモ」の原則です。

音訳者の皆様にご使用いただいて、聴読者の皆様からもご意見をお寄せいただいで、よりよいものに育てていただけることを願って止みません。

「東京漢点字羽化の会」第151～159回 例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2018年7月の例会（第151回）7月11日（水）

13～30～15～30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

朝日「木簡」のグループ分けをしていただいた。

7月18日の横浜での印刷をIさん、Sさん、Mさんのお3方がいらしてくださる。いつもありがとうございます。今年の暑さは特別ですので呉々もお気をつけください。

10月の活動予定を決めた。例会は10日（水）、学習会は10月20日（土）に決まった。

横浜から吉田様がお見えになり、『萬葉集釋注』第8巻の校正の説明に来てくださった。皆様どうぞよろしく願います。

『古語辞典』の本文の後の「万葉仮名」の表や「歴史的仮名遣い」、その他参考になるものが沢山あるの

で、これらも入力していただくことにした。先ずMさんに、PDFファイルにして、全員に送っていただきたい、それぞれが入力し、どの方法がよいか、岡田さんと皆様と、検討して入力方法を決めることにした。

この参考文献が終ってから、これまでに入力し終えているものを再校正することも決めた。更に白川静著の『後期萬葉集』も入力していただきたいと、お願いした。

7月28日の学習会（通122回）は関東地区に台風の影響が予想されるので大事をとって中止にした。

2018年8月の例会（第152回） 8月22日（水）

13:30～15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
今月は予定した日にお部屋をお借りできなかったの
で、8月18日が学習会、8月22日が例会、という何時
もとは異なる日程となった。

ところが、8月18日に学習会を予定していたが、岡田さんのご都合がつかなくなり、8月の学習会は急遽中止になってしまった。

朝日「木簡」の入力のグループ分けをした。

9月19日、印刷に行ってくださいるIさん、Sさん、Mさん、お3人の皆様よろしくお願いいたします。

11月の14日の例会を決め、学習会の日については、もう少し検討することにした。古語辞典はさらに新しいところがまとまり岡田さんに送られてきた。

古語辞典の付録について、Nさんがたたき台のデータを作ってください、齋藤さんと岡田さんが検討し、例会の中でもさらに皆で話あって一部が作り始められた。

白川静の「後期萬葉集」については、9月の例会出に検討することにした。

2018年9月の例会（第153回） 9月12日（水）

13:30～15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
ご事情があつて、数か月の間、岡田さんは東京羽化の活動をお休みなさると言われた。けれども会員一同で留守を守ることにした。幸い皆様は力を付けてくださっていることと、岡田さんの片腕ともなるSさんがいらっしゃるので、Sさんを中心に活動を続ける。

今日はその準備と打ち合わせをした。

いつもの朝日「木簡」の組み合わせを決め、12月の活動予定を決め、古語辞典の付録について岡田さんからお話があった。

朝日の記事の中で少し厄介な表記があったのを、岡田さんが説明してくださった。9月19日の横浜での印刷には近頃すっかりお任せしている3人の方が行ってくださることを確認した。いつもありがとうございます。

2018年10月の例会(第154回) 10月10日(水)

13…30 5 15…30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

岡田さんがお休みをなさっているが、Sさんを筆頭に会員の皆様がしっかり留守番を務めてくださるので心強い。皆様ありがとうございます。

先ず、朝日の木簡の入力のグループ分けを決めていただいた。入力だけは行ってデータをストックしておいて最終決定を岡田さんにしていただくので何時もの手順で行なわれた。

これまでに入力してあるものの再校正をすることに決定した。

11月の例会は各自パソコンをご持参いただいて、M

さんに実際の使い方の細かいところを説明していただくことにした。これはミニ講習会で個人的にお互いに教えたり教えられたりして和やかなもの時になると思う。

2018年11月の例会(第155回) 11月14日(水)

13…30 5 15…30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

今月は岡田さんがお休みなので、ミニパソコン講習会ということで、とくにQXの使い方その他有効に時間を使って学んだ。皆様が楽しそうにいられたのが木村には大変ありがたいです。

いつものように、朝日の記事の入力のグループ分けを決めていただいた。

2019年2月の活動予定日も決めた。

『古語辞典』の付録についても皆様が手がけてくださっている。

12月の例会には、これまでに入力してあるものの構成、手直しなどを行いたいと話し合った。

2018年12月の例会(第156回) 12月12日(水)

13…30 5 15…30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

この12月の例会は156回で、丁度丸13年経ちました。本当に皆様ありがとうございます。どうぞ今後とも呉々もよろしく御願ひ致します。

『古語辞典』の本文はほぼ入力が終わりましたが、その付録が詳細にわたり、なかなか難しいとのご報告をいただきました。

そのほかこれまでに入力していただいたものの再校正など、皆様ご苦勞をなさりながら地道にお仕事を続けてくださっています。

2019年1月の例会(第157回)1月9日(水)

13・30〜15・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

2019(平成31)年の七草も過ぎました。昨年中は大変お世話になりました。本年もどうぞよろしく御願ひいたします。

和暦の平成は4月一杯で替わりますが、どのような元号になるのか気になります。

2018年暮れは朝日「木簡」の記事が2週刊休載でしたので寂しいところもあります。今年もグループ分けをしてデータをきちんと作ってくださいたいです。

点字を知らなくてもパソコン入力が得手の方に敢えてボランティア活動をしていただける方にお声をかけて始めましたこの会ですが、やはり点字を少しご理解いただいた方が入力その他に便利なこともあり、そんなことも少しお話いたしました。

『古語辞典』の付録の中に宮殿などの図があり、これをどうしたらよいか、立体図の作り方についての話も出て、具体的に考える必要があるかどうかもし話しました。

2019年2月の例会(第158回)2月13日(水)

13・30〜15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

岡田さんが今日から復帰されて全員ほっとした。何時ものように朝日「木簡」のグループ分けをした。

横浜羽化の吉田さんが見えて、『萬葉集釋注』の校正について話された。

『イワナに古語辞典』の入力方法について岡田さんから丁寧な説明を受けた。

4月は10日が例会、20日が学習会、

5月は8日が例会、18日が学習会である。

東京羽化発足以来初めて8月をお休みに決めた。
会員のお一人が体調を崩されたという報告を受けて
心が痛い。

2019年3月の例会(第159回)3月13日(水)

13・30〜15・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室
ボランティア保険の手続きを今年も会長に御願いし
た。

先ずいつものように朝日「木簡」のグループ分けを
していただいた。

『萬葉集釋注』の第7巻の校正が終わり、横浜では
印刷、製本の最終段階に入っておられるとのことであ
る。今年も横浜の図書館に納められるのもう直ぐの
ことだと岡田さんからの報告があつた。

6月の予定を決めた。

『古語辞典』の難解文字について岡田さんが更に漢
字の詳細を検討されて、より正しい漢点字になるよう
チェックして下さっていることを、例を挙げながら
解説して下さった。

今日は珍しいものを岡田さんが持って来て見せてく
ださった。黒曜石と乳香である。

黒曜石は表面がつるつるしているところと、ざらざ
ら、とげとげしているところがあり、すべすべのとい
ろは光っており、ざらざらなところは黒いのだとい
う。この黒曜石は伊豆7島の恩馳(おんげせ)島で採
取されたものだという。
乳香は確かに香りがあつた。

* 予告

2019年4月の例会(第160回)4月10日(水)

13・30〜15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
2019年4月の学習会(第129回)4月20日(土)

17・30〜19・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

2019年5月の例会(第161回)5月8日(水)

13・30〜15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2019年5月の学習会(第130回)5月18日(土)

17・30〜19・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

2019年6月の例会(第162回)6月12日(水)

17・30〜19・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2019年6月の学習会(第131回)6月15日(土)

17・30〜19・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

* 8月は、例会も学習会もお休みにする。

わたくしごと

羽化115号では「積み重ねられたわたしへの形見分け」として書かせていただきましたが、長すぎますので、二度に分けさせていただきました。恐縮ですが後半も目を通していただけましたら感謝です。

〔羽化115号の木村のこの文章の上につきまして一部訂正させていただきます。高戸要さんのお名前は、本名は「高戸」であり、劇作家としては「高堂」を名乗っておられました。115号を読んでくださった友人が教えてくださいました。ありがとうございます。〕

『積み重ねられたわたしへの形見分け』（下）

「『銃剣とチョヨンの舞』の作者である李盤（イバン）はわたし（高堂）に言いました。

（ベトナムの人に会ったとき、ベトナムのハノイにもチョヨンの舞のようなものを芝居にして、観てもらいに行きたくなりました）」と話してくれました。わたし（高堂）は気付きました。韓国がベトナム戦争に参戦

したとき、イバンとその周辺の人たちは反対をしましたが、多くの韓国人の賛成を受けてベトナム戦争に加わったことをイバンは痛みとしているのだ、と思ったのです。韓国は日本から被害を被り、その痛みを知っていたはずなのに、今度は自分たちがベトナムの人たちに被害を与えてしまった。これは韓国人が加害者で、ベトナム人が被害者であったことをイバンは自己告発しようとしているのだと思いました。私はイバンの話を聞きながら、（人間の罪という現実が、繰り返し繰り返して歴史の中で起こってきて、それがチェーンのように繋がっていて、またその罪が増殖して、人間の歴史、人間の生きていく姿をめちゃめちゃにしている）と感じました。わたしはこの人間の罪の現実をどうすることもできないのではないかという絶望的な気分と、空しさに襲われたのです。けれども先輩仲間である椎名麟三（しいな りんぞう）が書いた戯曲が希望を持たせてくれましたので、ここに紹介させていただきます。」

〔以下椎名麟三の戯曲『自由の彼方で』の一部

を引用する。」

清作というコック見習いの青年が自殺します。

そこにスポットライトがあたります。

清作（困った声で） 神様、わたしは、山田清作

です。この死んだわたしは、これからどうなるんです

か。（間） 神様！

神の声（ラウドスピーカーのような大きな呆れた

声） ほんまにお前は、つまらんやつちやな。

清作（うちしおれて） はい、神様。

神の声 もう一度生きなはれ。

清作（おどろいた声で） え？また同じ目にあう

んですか？

神の声 そうや…みじんの狂いもなくな。

清作 どうして、あんなくだらない生活をまたや

るんですか？

神の声（厳然と） お前がそれをえらんださかい

や。

清作 だって、神様、あんな私の生活、ほんとう

にくだらないじゃありませんか。

神の声（いかって） ほんとうにやつて？

清作（おびえて吃る） はい、ほんとうに：

ほんとうに悲しいほどくだらないのです。

神の声（いかって） 阿呆たれ！お前の生活はく

だらんことはたしかや。しかしやな、ほんとうにくだ

らんとはいわせへんで。ほんとうにくだらん生活なん

て、お前ら人間にはあらへんのや。そんなこと思うと

るさかい、わいはお前をつまらん男やというんや。

清作（神妙に） はい、わたしはつまらん男で

す。ほんとうにそうです。

神の声（いかって） また、ほんとうにいいや

がる。やつぱり、お前はもう一度生きなあかん。もう

一度生きて、くだらんことはくだらんけどやで、どん

な人生でも、ほんとうにはくだらんのやあらへんと、

こうはつきり腹にこたえるまで生きるんや。

———

点訳された追悼文集をいただいてから一週間後に点
訳者に会えた。

「木村さん、あれ読みましたか？」と言われ、わた
しは首をひっこめなくなった。難しくて全部は読み切

れていない。正直にそう言った。

「そうですね、ゆっくり読んでください。あの文集に記されている聖書の箇所も、丁度わたしも、日本キリスト教団の聖書を持っていたので、記されている箇所を全部読みました。牧師さんのお話もよく分かりました。わたしは、今とても感謝しています。あの追悼文集とバッハに！つい最近孫が『マタイ受難曲』の、子供の合唱団の中のひとりですが、舞台に出て、演奏したのです。プログラムノートを見ながら演奏を聴きました。最初は単純に、孫がこの合唱団のひとりとしてここに居られるのがうれしかったのですが、それはほんの最初だけでした。演奏が進むにつれて、ただ、もう涙がこぼれてこぼれて、ノートを汚すまいと、そのことも気になって困りましたが、とうとう音楽だけに集中することにしました。全く初めてのことです。木村さんから読ませていただいた文集があったからよけいにこのバッハの意味が分かったのだと思います。改めてありがとうございます。わたし、これで、もう何時でも死ぬる。安心して死ねます。」

と重厚なおごそかな声で語っていらした。

わたしは一言も言えなかった。が、やっとわたしは、「バッハのことと、この文集のことでゆっくりお話ししましょう。わたしも『マタイ受難曲』は大好きですから、まず、この文集を全部読んでからお時間を作ってください。わたしこそうれいのです。バッハのよさを知っていただけなことと、点訳していただけたこと、ほんとうにありがとうございます。」

この日、これだけ交わすのが精一杯であった。点訳者が座っているとすると、わたしとの位置、距離感も今だに忘れられないほど鮮明である。

そしてその次の週は言葉を交わす時間もなく、わたしは家に帰った。

その夜10時くらいだったか、点訳サークルから電話があり、

「今夜会長が亡くなりました」という衝撃のニュースが入った。

「え？」と言ったきりなにも言えず、一方的に相手の報告を聞くだけであった。

心臓があまりよくないとは言っていらしたが？先週のあのときがお別れだったとは気づかなかった。とい

うよりあの時は特別お疲れのようだったから、バッハと文集の話は次回にしようと思ったのだ。

わたしは思いたい。本当にあの方は安心して逝けたのだらうと！ことさら一つの宗教を信ずる方ではなかった。

けれどもこの追悼文集をお願いする時、わたしは念のため、

「クリスチャンとしての生き方をなさった方の追悼文集なので、やはりキリスト教的考えかたのものですが、抵抗はありますか？」と問い、

「それはかまいません」とおっしゃるのを聞いて安心してお願いできたのである。

それが何と、お孫さんを通して、バッハに繋がるとは不思議でならない。

この文集はこの方からの本当の贈り物と想っている。これはわたしにとって二重三重の、バッハを含めてこれらの方々からの「積み重ねられたわたしへの形見分け」ではないかと思っている。

なお、奇しくも今年2019（平成31）年3月1日は「韓国独立運動祈念百年」に当たる。

【参考】

劇作家高堂要（本名高戸要）

1932年4月10日生まれ、2001年12月21日（金）死去 69歳

椎名麟三、1911年10月1日～1973年3月28

日 死去

参考文集、『高戸要追悼文集』

日本キリスト教団三鷹教会有志、2002年2月発行、

三鷹教会機関誌『井の頭通信』臨時号、

『高戸要 追悼文集』の漢点字訳者、草刈和枝、

漢点字訳依頼日、2005年クリスマス直前

2006年4月1日（土曜） 漢点字訳完成、

2006年4月15日、漢点字訳者、草刈和枝、死去

2019年1月26日（土曜）

「報告と案内」



一 本誌『うか』一一六号について

昨年十月に発行を予定しておりました本誌一一六号、やっと今月にお届けできる運びとなりました。

発行の責任を担っております岡田健嗣の健康上の事情によりまして、予定しておりました昨年十月と、本年一月の二回を、休刊とさせていただきます。読者諸兄姉に置かれましては、誠に失礼致しました。今後は従来通り、季刊で発行させていただきますとおりあります。

相変わりがませずご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

なお横浜並びに東京の羽化の会の活動は、これまで通り滞ることなく遂行されております。

二 賛助会費ご納入の皆様のご芳名

左に、平成三十年度に、本会へ賛助会費を頂戴致しました皆様のご芳名を掲げさせていただきます。

雨宮絢子様、 吉野紀恵様、 坂口喜代様
武田幸太郎様、 河村美智子様、 馬場威力様

田崎吾郎様、 木原純子様、 政井宗夫様
村田忠禧様、 関口常正様、 岡 稲子様

謹んで御礼申し上げます。誠にありがとうございます。今後とも相変わりがませず、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

三 『萬葉集釋注』第七卷

横浜漢点字羽化の会では、横浜中央図書館へ納入する漢点字書として、昨年度（平成三十年度）も、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の第七卷を、漢点字訳して納入致しました。

会員の皆様、大変ありがとうございました。

第七卷には、「万葉集」の卷十三・十四が収められています。第七卷の伊藤先生の「釈文」の冒頭を引用しますと、まず卷十三から、

（前略） 卷十三の「雑歌」は一五の歌群によつて成る。そして、その一五の歌群は、「大和（第一〜七群）—伊勢（第八群）—近江（第九〜十一群）—美濃（第一二群）—安（25ページへ続く）



新元号「令和」の典拠とされている『万葉集』巻五「梅花の歌三十二首」の序文は漢文の形で記されています。

梅花歌 卅二首并序より

天平二年正月十三日、萃ニ于帥老之宅一、申ニ宴會一也。

于レ時初春令月、氣淑風和。

梅披ニ鏡前之粉一、蘭薰ニ珮後之香一。加以、曙嶺移レ雲、松かケテうすものヲかたぶくきぬがさヲゆふへノくきニレ掛レ羅而傾レ蓋、夕岫結レ霧、鳥封レ穀而迷レ林。庭舞新蝶、空帰故雁。

伊藤博『萬葉集釋注 原文篇』（集英社）
『萬葉集釋注 三』（集英社文庫）参照

梅花の歌三十二首并せて序より

天平二年の正月の十三日に、帥老が宅に萃まりて、宴會を申ぶ。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披く、蘭は珮後の香を薫らす。しかのみにあらず、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾く、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封じらえて林に迷う。庭には舞う新蝶あり、空には帰る故雁あり。

（読み下し文は現代仮名遣い）

天平二年正月十三日（750年太陽暦2月8日頃）、太宰府長官大伴旅人邸で梅花の宴が催された。令月＝よい月。めでたい月。鏡前の粉を披く＝佳人の鏡前の白粉（おしろい）のように咲いている。珮後＝珮（はじ）は帯の飾り。ここでは匂い袋か。「後」は、鏡前の「前」と対をなす。蓋＝ふた、おおい、かさ。蓋は蓋の俗字。きぬがさは、貴人にさしかけた柄の長い傘。岫（うすもの）＝山の洞（ほら）。穀（うすもの）＝霧のたとえ。（羅は雲のたとえ）

梅花の歌三十二首序
 「于し時初春令月、氣淑風和」以下の部分の漢点字訳。

于 時 初 春 ノ 令 月、れい げつ ニ シテ、
 氣 淑、よ ク 風 和、やはら グ。 梅 ハ
 披、ひら ク 鏡 前、きやう ぜん 之 粉、ふ
 ん ヲ、 蘭、らん ハ 薫、くゆ ラス 珮
 後、はい ご 之 香、かう ヲ。 加 以、しかのみ
 にあらず、 曙、あした ノ 嶺、みね ニ 移 リ
 雲、 松 ハ 掛 ケテ 羅、うすもの ヲ 而
 傾、かた ぶ ク 蓋、きぬ がさ ヲ、 夕、ゆ
 ふへ ノ 岫、くき ニ 結 ビ 霧、 鳥
 ハ 封、と チラエテ、うすもの ニ 而
 迷、まと フ 林 ニ。 庭 ニハ 舞 フ 新
 蝶、しんてふ アリ、 空 ニハ 帰 ル 故 雁、こ
 がん アリ。

穀(うすもの)はJIS第1第2
 水準外の漢字。

序の後、客人31名と旅人の歌
 各一首(815~846番)が続く。
 『[曼朱院本]萬葉集』序全文 →



(22ページから続く) 芸または長門(第一三群) 一天界(第一四・一五群)の順序になっていると認められる。これは、言いかえれば、「畿内(大和)―東海道(伊勢)―東山道(近江・美濃)―山陽道(安芸または長門)：天界」の順序であって、『延喜式』や『和名抄』に見られる、上代国郡の図式に完全な形で対応している。この一五群を別の面から見ると、「春到来の喜び(第一群)―花咲く春山の讚美(第二群)―秋山の黄葉の讚美(第三群)―川ぼめ(第四群)―一人ぼめ(第五群)―旅の歌(第六く一三群)―天界の歌(第一四・一五群)」という流れを辿っている。(以下略)

卷十四の「釈文」の冒頭から、

右三三四八の歌以下、卷末の三五七七の歌まで二三〇首は、「東歌」(あづまうた)として集められている。すべて短歌だけで成る。「東歌」は、東国の歌、の意。卷十四の総題である。大きくは、中央の歌の集合体である卷一く十三に、小さ

くは、古代宮廷歌謡集、古代宮廷長歌集として成長した卷十三に対するもので、東国人の風俗・心情を都人に知らせるためにまとめられたものと認められる。『万葉集』は、「古」(巻一・二)、「古今」(巻三く四・巻七く十二)、「今」(巻五く六)という体系を踏んできたのだが、宮廷歌謡集にして「古」と「今」の組織とは無縁の、純粹な類聚歌巻卷十三を、その古今構造である卷一く十二の最後に捉えた。「都(みやこ)」の正規の歌々の集成はそこで終わった。そこで、そのあとに、「鄙(ひな)」の国の歌の集団である「東歌」を置いたのである。「東歌」も、卷十三と同様、古今構造とは無縁で、純粹な類聚歌巻としての性格を貫く。まず、国名のわかる歌とわからない歌とに大別し、さらに、前者は、「雑歌」(ただし、この部立名は伝来本には脱落している)、「相聞」「譬喩歌」、後者は、「雑歌」「相聞」「防人歌」「譬喩歌」「挽歌」に分けている。(以下略)

ピンディスプレイで読む電子版のご用意もございます

す。ご要望をお寄せ下さい。

四 『岩波古語辞典』

東京漢点字羽化の会では、『岩波古語辞典』（大野晋他編）の漢点字訳を進めて参りましたが、現在ナ行まで完成し、電子版でご提供できるようになっております。視覚障害者の言葉の世界が大きく広がっております。ご要望をお寄せ下さい。

五 「岡田メモ」

本誌にもご紹介致しましたように、音訳用の漢字説明を、「岡田メモ」としてまとめました。本会のホームページに常駐してございますので、ご自由にダウンロードしてお試しいただけます。お試し下さい。

なお現在チューンアップ中ですので、今暫く後に、現時点での決定版をお届けできる予定です。

また、音訳書の中で、漢字の字形の説明が必要なこともしばしばあるかと存じます。その方法の原則も、近い将来、お届けできればと考えております。ご期待下さい。

六 FM戸塚、「シビックプライド・ダイアログ」

元横浜市議の大滝正雄先生のお声掛かりで、一昨年（平成二十九年）十月に、横浜市にございますFM局・FM戸塚にお招きいただいて、「シビックプライド・ダイアログ」という番組に出演させていただきました。

その局のホームページに、その番組がアーカイブとして収められております。いつでも誰でも聴くことができるようになっております。そのアクセス数が、昨年の十月の時点で、千件を超えたというニュースをいただきました。驚きとともに、これだけのご関心をいただいておりますことに、胸の熱くなる思いであります。

今後は視覚障害者も、臆することなく言語文化の活動に、どしどし参加して行きたいものと思っております。視覚障害者諸君、頑張りましょう。

大滝先生、またFM戸塚でご担当下さいました皆様、大変ありがとうございます。まだまだお世話になることと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

編集後記

▼この3月に『萬葉集釋注』第七卷(全9分冊)の点字印刷・製本を完了し、横浜市中央図書館に無事納入することが出来ました▼振り返ってみると、初めて漢点字書籍(漢点字版「漢字源」)を中央図書館に納めたのは20年あまり前のことになりました。そのころ製作した点字本が1冊、私の手元にあります。これは製作過程で大きなミスをして、作り直しをして納品した残りの品物だったのです。これは貴重な記念品ですが、その出来映えがとてもいい感じなのです▼それから毎年10冊前後の点字本を製作していますが、出来上がりを見ると、それ以上にいいものがどうしても出来ないのです。こういう作業は、経験を重ねる毎にだんだん慣れて上達するはずですが、結果としてそうならないのはどういうことだろうかと、不思議でありません。どうも、年齢を重ねて能力が衰えて来たとしか考えられません。そのためにはよい後継者を育成していく必要をつくづく感じますが、残念ながら適任者を見つけれないままでいるというのが現状です。

木下 和久

音訳ボランティア募集

現在『常用字解』の音訳を進めておりますが、新しい皆様のご参加を求めています。音訳の経験をお持ちの方であれば、大歓迎です。

活動の手順は、『常用字解』(白川静著、平凡社)の各項を分担して、まず文章化をしていただきます。その相互校正を経て、音訳をしていただき、さらに相互に校正をしていただいて、編集という順序になります。

また活動は、基本的にご自宅をお願いして、メーリングリストで通信していただきます。年に3・4度ほど、東京の墨田区立ひきふね図書館を会場に、ミーティングを行っております。

今回は7月1日を予定しております。当日は、新しいご参加者向けのオリエンテーションを中心に行います。

お申し込みは、岡田健嗣までお願い致します。

多数のご参加をお待ち申し上げます。

(電話：090-9003-7279 メールアドレス：下記)

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。